

耳鼻咽喉科

Department of Otolaryngology,
Head and Neck Surgery

耳鼻咽喉科長
伊藤 壽一



機能温存・再生をめざした 頭頸部機能外科

頭頸部が担う機能の温存、再生を主軸に据え、特に下記のような医療に力を入れている。①人工内耳手術：近年では乳幼児の高度感音難聴症例の診療・手術に力を入れている。②内視鏡下鼻頭蓋底手術：難治性副鼻腔炎や頭蓋底腫瘍に内視鏡を用いた手術を施行している。③音声外科 甲状軟骨形成術：声帯麻痺に対してゴアテックスを挿入片とした甲状軟骨形成術を行っている。④甲状腺手術：術前声帯麻痺のない甲状腺がん反回神経癒着症例で反回神経を極力温存し、8割で永続的声帯麻痺を回避できている。⑤頭頸部がんの機能温存手術・チーム医療：放射線科、形成外科や言語聴覚士と協力して、術後の音声・嚥下機能の温存・回復を図っている。

代表的診療対象疾患

両側高度感音難聴、聴神経腫瘍、メニエール病、顔面神経麻痺、慢性中耳炎、真珠腫性中耳炎、耳硬化症、慢性副鼻腔炎、嗅神経芽細胞腫、アレルギー性鼻炎、反回神経麻痺、甲状腺腫瘍、喉頭がん、咽頭がん、副鼻腔がん、口腔がん、唾液腺腫瘍

診療体制と治療実績

外来診療体制と実績

2013年度の外来患者数は延べ27,262人(うち初診3,080人)であった。専門外来は、咽頭、中耳炎・側頭骨外科、人工内耳、難聴、小児難聴、遺伝難聴、鼻・副鼻腔、音声、腫瘍・甲状腺、めまいの各領域に分かれ、専門性の高い医療を提供している。また、Day Surgery Unitを利用した日帰りあるいは短期入院手術を行い(2013年度は287例)、患者さんの負担軽減を図っている。

入院診療体制と実績

2013年度の入院患者数は773例で、そのうち中央手術室を利用する手術症例は419例であった。手術症例(長時間手術や綿密な術後管理を要する症例)、頭頸部がんに対する放射線治療・抗がん剤治療症例や強い急性炎症症例、末梢性めまい、突発性難聴、顔面神経麻痺などが入院の対象である。病床数は45床、病床稼働率は平均94%、在院日数は平均18.1日であった。主な治療の実績は表の通り。

①主な入院治療と件数		②主なDay surgery unit 利用手術と件数	
人工内耳埋め込み術	35	鼓膜・鼓室形成術	1
聴神経腫瘍摘出術	2	内視鏡下鼻副鼻腔手術	72
鼓室形成術	67	声帯ポリープ・腫瘍切除	47
内視鏡下鼻副鼻腔手術	96	頸部腫瘍切除術	39
甲状腺手術(がんを含む)	118	甲状軟骨形成術	4
喉頭がん(手術または放射線)	16	甲状腺手術	7
下咽頭がん(手術または放射線)	47		
中咽頭がん(手術または放射線)	38		
上顎がん(集学的治療)	22		
口腔がん(手術または放射線)	64		
唾液腺がん(手術、放射線併用)	4		

臨床研究の取り組み

頭頸部領域におけるロボット支援手術

臨床研究(厚生労働省科学研究費支援事業)として当科が主導して咽頭がんに対する経口的ロボット支援手術の有効性・安全性の評価を2013年度から開始した。本研究は咽頭がんTis, T1, T2症例に対し経口的ロボット支援手術を施行し、病理学的断端陽性率を主要エン

ドポイント、手術完遂率、術後入院日数、術後胃管・胃瘻利用率、嚥下機能、手術関連有害事象などを副次エンドポイントとして、頭頸部領域におけるロボット支援手術の有効性と安全性を検証する臨床研究である。目標症例数は20例で、東京医科大学、鳥取大学の耳鼻咽喉科と協力して施行している。本年度は当院では1例に施行した。